

## 対人認知構造における個人差の測定

—認知的複雑性への多次元解析的アプローチ—

林 文 俊

### 問題と目的

対人認知過程を解明するには、単に外的な刺激情報条件のみでなく、刺激情報とそれにもとづく判断を媒介する認知者側の個体変数を分析することが不可欠である。本研究では、対人認知構造を、人が他者のパーソナリティ認知に際して働かす多次元的認知空間としてとらえ、その構造的特徴の個人差をいかにして測定するかといった方法論的問題を吟味する。

この問題に対する認知型からのアプローチとして最も代表的なものに認知的複雑性 (cognitive complexity) の研究がある。認知的複雑性とは、「社会環境 (他者) を多次元的に認知できる能力 (Bieri ら, 1966)」と定義され、このような能力の高い人は、いろいろな可能性を含んだ事象に対して、極端で、一義的な解釈をほどこすことが少なく、事象を ambivalent な観点からも認知できると考えられている。この概念に関しては、現在まで約 20 年間にわたって膨大な量の研究が行われているが、そこでの最も大きな問題点は、認知的複雑性の測定が研究者によって極めて恣意的になされ、しかも、これらの測度間の関連が十分に押えられていない点である。

他方、これとは異なった方向から各個人のもつ「暗黙裡のパーソナリティ理論 (implicit personality theory)」を分析するための、いくつかの方法が検討されている。その1つに、被験者に多数の刺激人物に対する性格的特徴の評定を求め、これを各被験者毎に因子分析する方法がある。また、因子分析的手法にもとづくもう1つの方法としては、被験者が何人かの刺激人物について評定した資料を、全被験者をこみにして因子分析し、ある被験者のある刺激人物についての評定資料が各因子に対してもつ因子得点によって個人差を分析することが考えられる。このような方法は、従来あまり試みられていないが、本研究の<研究 I>では、これと同様の観点から、数量化第Ⅲ類の手法を用いて対人認知構造の個人差を多次元的に解析し、これとの関連で、認知的複雑性の測度の妥当性について予備的検討を加える。

Sherman (1972)は、個人差を考慮した多次元尺度構成法 (MDS) の一手法として Carroll & Chang (1

970) が考案した INDSCAL モデルを対人認知の領域に適用し、この手法の有効性を吟味している。このモデルは、知覚的判断において人は共通した諸次元のセットを用いるが、各次元に対するウェイトのおき方は個人毎に異なっている、という前提に立つ。したがって、対人認知構造を構成する各次元に対するウェイトの配列パターンを考え、重みづけの程度が一樣であれば認知的複雑性が高く、ある次元 (特に評価的次元) に偏ったウェイトの配列パターンをもつ場合には認知的複雑性が低くなると仮定するならば、このモデルは、対人認知構造における個人差の測定に極めて有用な方法であろう。<研究 II>では、このような観点から対人認知構造の個人差を分析し、そこで測定された個人差が現実の対人認知過程にどのような差異をもたらすかを検討する。

### 方 法

<研究 I>では、大学生男女 44 名を対象に、8 人の役割人物 (role person) の性格的特徴を 20 組の特性形容詞対を用いて評定させた。得られた資料から、Seaman & Koenig (1974) の手続きに準じて、各被験者毎に 7 つの認知的複雑性得点を算出した。また、ここで対人認知構造の次元的特徴の個人差を分析するために用いた方法は、Cronbach (1958) が提案している個人のパーソナリティ認知空間の分析の構想を基礎としており、その詳細については前報 (林, 1976, 名古屋大学教育学部紀要第 23 巻) を参照されたい。

<研究 II>では、中学生男女 162 名を対象に、8 人の役割人物および仮想人物の性格的特徴を 27 組の特性形容詞対を用いて評定させた。また、このうち 42 名の被験者には第 2 回目調査として、学級成員の中から、好きな人、嫌いな人を 3 人ずつ選ばせ、これらの人物および自分自身の性格的特徴を、Peabody (1967) や塗師 (1969) の研究を参考にして構成された 14 組の“属性尺度”上で評定させた。これは、他者のパーソナリティ認知の正確度および「仮定された類似性 (assumed similarity)」の傾向を、認知の記述的側面にとらえることを目的としたものである。その他、Heider (1946, 1958) の仮説にしたがう三者関係の認知におけるバランス傾向

をとらえるために、関係知覚テストを実施した。

結果と考察

1) 認知的複雑性の測度としては、TCCおよびLPPが概念に則した比較的妥当なものであり、TPCはTCCと有意な正の相関をもつにもかかわらず、いくつかの問題を含んだ測度であることが明らかにされた。TCCとは、RepテストにもとづくBieriの測度と同様、性格特性×役割人物の反応マトリックスにおける行間すなわち各性格特性（constructs）間の相対的分化度を表わす測度であり、TPCは、これを列間について求めたものである。また、LPPとは、Fiedler（1964など）が提出したLPCに類似した測度であり、嫌いな他者をどの程度ネガティブに評価しているかを表わす。

2) 被験者が大学生の場合には、認知的複雑性の諸測度間の相互関連パターンには、顕著な性差が認められたが、中学生の被験者では、このような性差は見られなかった。特に、TCCとLPPとの間には、大学生男子、中学生男子・女子では有意な正の相関があるが、大学生女子の場合には有意ではないが負の相関が得られた。

3) <研究II>では、まず、対人認知構造を構成する基本次元について因子分析的検討（主因子法、バリマックス回転）を行い、以下のような図式が設定された。図は、一般的なSD因子としての評価因子は、対人認知の場合には、社会的望ましきの次元と親しみやすきの次元とから成り、さらに、前者は情動安定性と誠実性の2つに、後者は明朗性と魅力性の2つに分けられることを示している。なお、③の偏相関因子分析は、Kuusinen（1969）と同様の問題意識に立って、パーソナリティ

認知における記述的次元の抽出を試みたものである。

4) 役割人物に対する評定資料をINDSCALモデルで分析した場合、各次元に対するウェイトの大きさには、認知者の性による差異が認められ、社会的望ましき（特に、情動安定性）の次元に対するウェイトは男性の方が、親しみやすき（特に、明朗性）の次元に対するウェイトは女性の方が有意に大きかった。

5) 各被験者が役割人物および仮想人物を認知する場合に、それぞれ意味内容が対応した次元に対してもつウェイトの大きさ間には正の相関があり、この方法による対人認知構造の個人差の測度は、刺激人物の種類の違いによらず、かなり安定したものであることが示された。

6) INDSCAL分析で得られた各次元に対するウェイトの大きさと認知的複雑性の測度との関連については、被験者が中学生の場合には、TCCおよびLPPで測られる認知的複雑性の低い者ほど、他者のパーソナリティ認知に際して社会的望ましきの次元により大きなウェイトをおいていた。しかし、大学生の場合には、TCCに関しては中学生の結果と同じであるが、LPPに関しては、嫌いな他者をよりネガティブに評価する者ほど親しみやすきの次元に対するウェイトが大きかった。

7) Fiedlerら（1952）が見いだした「仮定された類似性」の傾向は、その後の研究で、好きな他者ならびに自己を評価的にポジティブな方向で認知することによって生ずる言わば見かけ上の傾向であるとされている（梶田、1967, 1968；など）。しかし、この点に關した本研究の結果では、Peabody（1967）のいう認知の記述的側面においてもなお、「仮定された類似性」の傾向が存在することが明らかにされた。また、この傾向の強さと三者関係の認知におけるバランス傾向の強さとの間には高い正の相関が認められた。このような結果は、「仮定された類似性」の傾向も認知的斉合性の諸理論の枠内でとらえられることを示すものとして、興味深い。

8) 認知的複雑性の測度およびINDSCALモデルで分析された個人差が対人認知過程に及ぼす影響については明確な結果は得られなかった。わずかに、魅力性の次元に対するウェイトが大きい者ほど、好きな他者に対するパーソナリティ認知の正確度が高く、これらの人物のパーソナリティを自己のそれに類似したものとして認知していることが示唆されたが、このような結果について明確な解釈をすることは困難であった。

今後、本研究で得られた知見についてさらに詳細な分析を加えると同時に、認知者のパーソナリティ特性との関連、発達段階による差異、判断事態が認知の構造的特徴に及ぼす影響などについて検討することが望まれる。

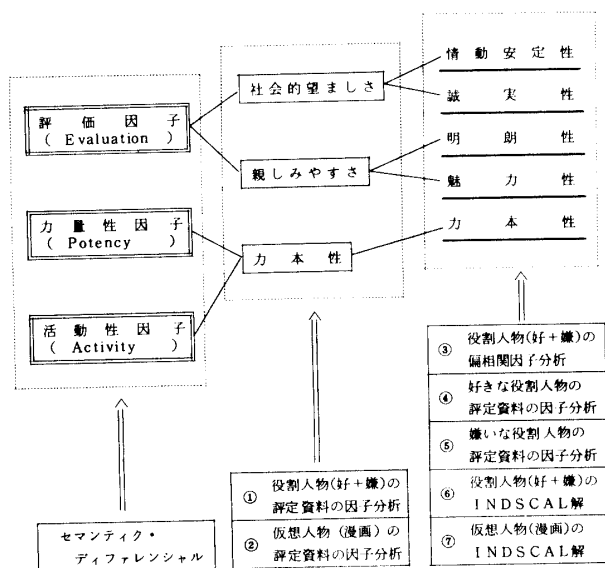


図1. 対人認知構造を構成する基本次元